

奈良文化財研究所創立六十周年記念

平城宮跡資料館 秋期特別展

地下の正倉院

平城宮第一次



D A I



G O K U



D E N



I N

の
す
べ
て

奈良文化財研究所創立六十周年記念 平城宮跡資料館 秋期特別展

地下の正倉院

平城宮第一次大極殿院のすべて



ALL ABOUT "THE AREA OF
THE FORMER IMPERIAL AUDIENCE HALL"

ごあいさつ

本年、奈良文化財研究所は設立 60 周年を迎えました。

奈良文化財研究所は、1952（昭和 27）年、文化財の宝庫、奈良の地で、美術工芸、建造物、歴史の研究者が、実物に即した文化財の総合研究をおこない、その成果を文化財保護行政に活かす目的で設立されました。

現在は、遺跡の発掘調査、保存、整備、活用に関する調査研究が主要な業務となり、対象も日本のみならず海外へも広がりました。これらの多彩な業務のなかでも、平城宮跡の発掘調査は 50 年以上にわたり、最も長期的に、重点的にこなってきています。

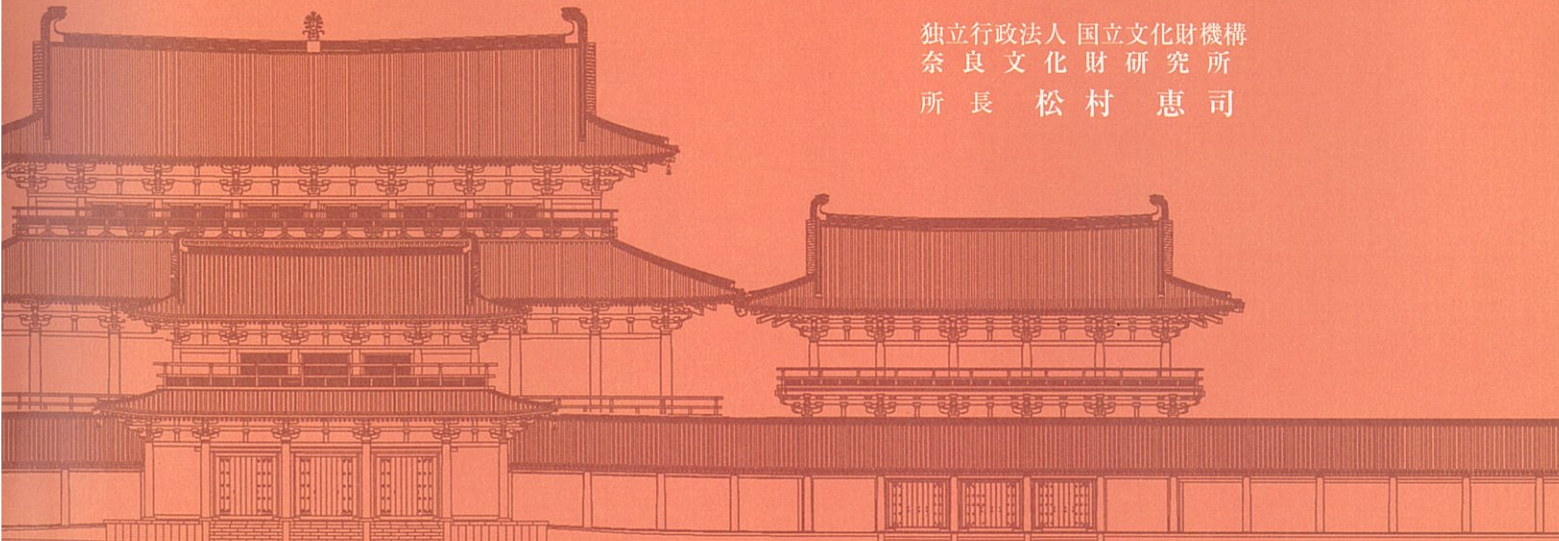
平城宮とは、奈良時代の都である平城京の中核です。奈良時代前半の平城宮には、天皇が出御する大極殿を中心建物とする、築地回廊に囲まれた広大な空間—第一次大極殿院がありました。奈良文化財研究所では、1959（昭和 34）以降、47 回にわたってこの跡地の発掘調査をおこない、全貌をほぼ明らかにしました。本展では、発掘調査成果のすべてを凝縮してお見せいたします。

また、蓄積された発掘調査成果が結実して、2010 年には第一次大極殿復原建物が堂々完成しました。遺構がわずかにしか残っていなかったため、重層の威容が復原されるまでの過程には、現存する木造建築や、絵画資料なども対象として、緻密な研究が積み重ねられました。その一端もご紹介いたします。

最後になりましたが、今回の展示にあたり、ご後援・ご協力いただきました各位に心から御礼申し上げます。

2012 年 10 月 20 日

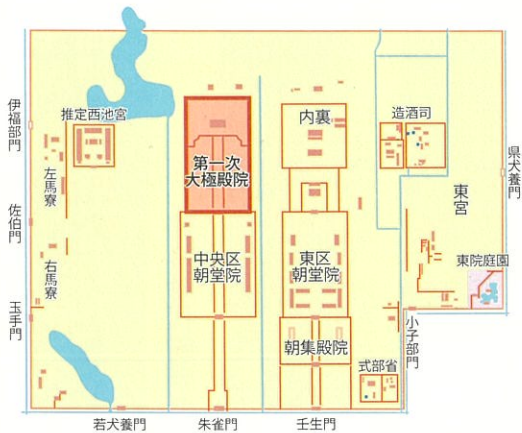
独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
所長 松村 恵司

- 
1. このリーフレットは、奈良文化財研究所創立 60 周年記念・平城宮跡資料館平成 24 年度秋期特別展「地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて」（平成 24 年 10 月 20 日～12 月 2 日）にあわせて作成したものである。
 2. 本特別展は当研究所企画調整部展示企画室が企画し、都城発掘調査部・研究支援部連携推進課の協力を得た。
 3. 本書の編集は、企画調整部展示企画室中川あや・渡邊淳子が担当し、芝幹が補佐した。本文の執筆は奈良文化財研究所所員の協力のもと、中川・渡邊が、木簡の解説は都城発掘調査部史料研究室渡辺晃宏がおこなった。遺物の写真は、企画調整部写真室の中村一郎・鎌倉綾、西大寺フォト杉本和樹が撮影した。
 4. 木簡の写真は、原寸の約 75% に縮小して掲載した。写真下のアラビア数字は、今回の展示における通し番号を示す。
 5. 木簡以外の遺物の写真は縮尺不統一である。
 6. 木簡は、保存に万全を期すため、会期中約 2 週間ごとに 2 回の展示替えをおこなう。
 7. 今回の展示にあたっては、以下の諸機関のご後援を得た。記して謝意を表す。
文化庁・国土交通省近畿地方整備局飛鳥歴史公園事務所・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会・読売新聞社・近畿日本鉄道株式会社・奈良交通株式会社・木簡学会

0 プロローグ

第一次大極殿院地区の変遷をたどる

奈良時代前半の平城宮

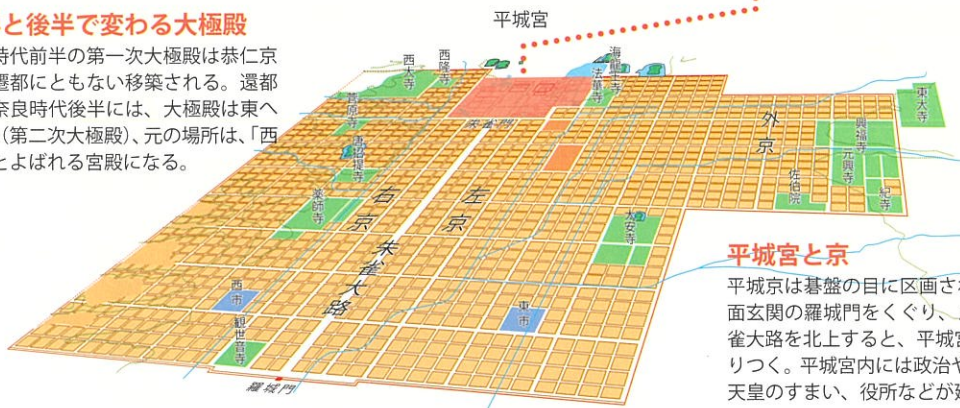


奈良時代後半の平城宮



前半と後半で変わる大極殿

奈良時代前半の第一次大極殿は恭仁京への遷都にともない移築される。遷都後の奈良時代後半には、大極殿は東へ移り（第二次大極殿）、元の場所は、「西宮」とよばれる宮殿になる。



平城宮と京

平城京は碁盤の目に区画された都である。京の正面玄関の羅城門をくぐり、メインストリートの朱雀大路を北上すると、平城宮の正門朱雀門にたどりつく。平城宮内には政治や儀式的場となる建物、天皇のすまい、役所などが建ち並んでいた。

大極殿院地区に関わるできごと
『続日本紀』などの文献資料の記述からも、第一次大極殿院地区の変遷が読み取れる。

七二〇(和銅三)	平城京に遷都。大極殿は未完成(南面回廊敷地上出土木簡)
七二五(霊龜一)	この間に藤原宮大極殿を平城宮に移転
七二七(養老一)	大極殿において元日朝賀
七二九(養老三)	大極殿において元正天皇が即位
七四〇(神龜一)	西朝(中央区の大極殿院・朝堂院)において集人の風俗・歌舞を見る
七四一(神龜二)	大極殿において元日朝賀
七四二(神龜三)	大極殿において元日朝賀
七四三(神龜四)	大極殿において元日朝賀
七四四(神龜五)	大極殿において元日朝賀
七四五(天平一)	大極殿開門において集人の風俗・歌舞を見る
七五〇(天平二)	大極殿において元日朝賀
七五二(天平四)	大極殿において元日朝賀。天皇が初めて冕服を着る
七五三(天平五)	大極殿において大隅・薩摩の集人の朝賀を受ける
七五五(天平七)	南楼において群臣に踏歌節の宴会を催す(東西様間を指すとみられる建物の文献資料上の初見)
七五七(天平九)	大極殿において金光明最勝土経講説
七六〇(天平十二)	大極殿南門で大射を見る
七六五(天平神護一)	恭仁京に遷都。その際大極殿と同廊を恭仁京に移築
七六七(天平神護二)	この頃大極殿院南面の様閣を解体(東西様閣出土木簡)
七六八(神護景雲一)	西宮前殿で元日朝賀
七六九(神護景雲二)	西宮前殿で慶會
七七〇(神護景雲三)	新嘗祭の豊采を西宮前殿に設ける
七七二(神護景雲四)	西宮前殿で道鏡が朝賀を受ける
七七三(延暦一)	西宮前殿で神徳天皇死去
七七四(延暦二)	長岡京に遷都
七七五(延暦三)	平安京に遷都
七八〇(弘仁一)	〔平城太上天皇の西宮〕
七八四(天長一)	平城太上天皇の宮地を占定(類聚国史ほか)
七八五(天長二)	〔類聚国史ほか〕
七八六(天長三)	平城太上天皇平城に行幸。宮殿未完成のため、故右大臣大甲臣清麻呂の家を御在所とする(類聚国史ほか)
七八七(天長四)	平城太上天皇平城遷都を図るも失敗し別荘。以後も平城宮に住む
七八八(天長五)	平城太上天皇死去(類聚国史ほか)
八二四(天長一)	平城太上天皇の親王らに平城西宮の管理・居住を認める(類聚国史ほか)
八二五(天長二)	(特記したものは八国史による)

大極殿院地区の移り変わり

大極殿院とは、古代の宮都における中心施設である。奈良時代前半の平城宮では、元日朝賀や天皇の即位、外国使節の謁見など限られた重要な儀式に用いられ、朱雀門の真北、文字通り平城宮の中心に位置していた。

ところが天平十二年(七四〇)、恭仁京遷都の際に、大極殿と築地回廊の一部は恭仁京に移築され、大極殿院地区は、都の中核としての機能を失う。天平十七年(七四五)に再び平城京に戻ると、大極殿院は東隣の地区に移り(第二次大極殿院)、当地は新たな建物を密に配した宮殿空間へと変貌をとげる。この宮殿は、文献資料に名がみえ、称徳天皇が居所とした「西宮」の可能性が高い。

延暦三年(七八四)に、長岡京へ遷都した後、平城宮は少しずつ解体が進められたとみられるが、大同四年(八〇九)、平城太上天皇は再びこの地を整備し、居所とした(平城西宮)。奈良時代後半の西宮の区画を基本的に踏襲してはいるものの、内部の建物は全て、新たに建て替えている。

平城太上天皇の死後、当地がどのように利用されたのか、具体的には明らかになっていないが、おそらく旧都の土地管理の拠点として機能したと推測されている。

だいごくでんいん

大極殿院 完成前夜

遷都時、大極殿は未完成だったー

I 大極殿院の時代

奈良時代前半の平城宮で、最も重要な儀式空間

大極殿院のようす

奈良時代前半、国家で最も重要な儀式がおこなわれた平城宮第一次大極殿院。この空間が具体的にどのような場であったのかみてみよう。

大極殿院は築地回廊で囲まれた空間で、その規模は南北約三一九・五m、東西約一七七・五m。甲子園球場一・五個分に相当する広さである。内部は広大な広場となっており、地面には全面に小石が敷き詰められていた。中心建物である大極殿は礎石建ちの大型重層建物で、背後に後殿をしたがえて、大極殿院の広場北側に設けられた壇上にそびえ立っていた。また、南面する築地回廊の中央には門（南門）が、その両脇には楼閣建物（東楼・西楼）が付設され、壮麗な景観を誇っていた。朱塗りの柱に漆喰の白壁、漆黒色の瓦葺きという極彩色を放つ建物が建ち並ぶさまは、訪う人々を圧倒したことだろう。

大極殿院の性格とその重要性を考えると、藤原京からの遷都後、いち早く造営が着手されたはずである。ところが、南面築地回廊基壇の整地土中から出土した一片の木簡により、遷都時、大極殿院が未完成であったことが示唆されている。奈良時代は、槌の音響くなかで幕開いたのである。

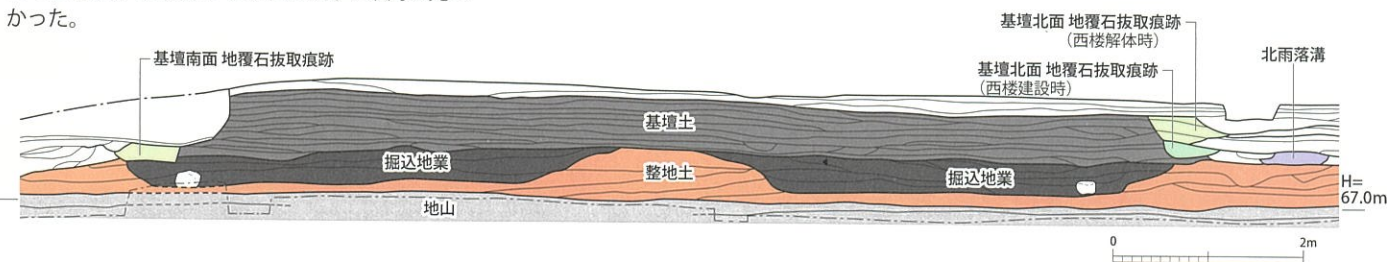


完成した大極殿院の復原イメージ

大極殿は和銅8年(715)正月には完成していたらしい(『続日本紀』)。このイラストのように、東西楼閣まで整備されるのは、もっと後のことである。

南面築地回廊の土層断面図

発掘調査で明らかになった築地回廊の基礎部分。地山の上に整地土を敷き、回廊の中心にあたる部分を残して南北両側に掘込地業を施している。この整地土から和銅3年の年紀を持つ木簡が見つかった。





(裏面赤外線写真)



1



(表) 伊勢国安農郡阿^{〔刀〕}里阿斗部身
(裏) 和銅三年正月



8

癸卯年太宝三年正月宮内省^{〔入〕}四年□□
年慶雲三年丁未年慶雲肆年孝服



5

(表) 大井里委文部鳥[□]
(裏) 米五斗



14

(表) 伊勢国安農郡県
(裏) 里人飛鳥戸椅万呂五斗

造営期の木簡

大極殿院を造営する際に運び込まれた整地土（造成土）から見つかる木簡は、その造営時期や過程を考える大事な手掛かりとなる。

五頁の木簡は大極殿院南面、西楼の建つ築地回廊周辺の整地土で出土した。

1は南面回廊の基壇の下から出土した、伊勢国安農郡（今の三重県津市付近）から納められた物品の荷札。品目・数量は不明であるが、下端を尖らせる形や、14のように同じ伊勢国の米と考えられる五斗の荷札が近くで見つかっていることから、米の荷札とみられる。

1には品目・数量がない代わりに、14にない年月が記されている。和銅三年（七一〇）はまさに平城遷都の年。この木簡の発見は、大極殿院造営予定地の造営が遷都直前までおこなわれていなかったという予想外の事実を明らかにした。『続日本紀』の記述も含めて考えると、大極殿そのものの竣工は和銅八年（七一五）まで遅れる可能性が高い。



15

(表) 丹波国水上郡石^(負)里笠取直子万呂一俵納
(裏) 白米五斗 和銅□年四月廿三日



18

(表) 三川国飽海郡大鹿部里人
(裏) 大鹿部塩御調塩三斗



17

不知山里俵五斗八升



6

海部郡前里 阿曇部都祢 軍布廿斤

造営期の木簡

周辺からは、ほかにも5など米の荷札の出土がみられる。造営に従事した役民の食料として米が消費されたあと、いらなくなった荷札はそのまま投棄され整地土に紛れ込んだのだろう。役人の事務作業というより、作業現場を彷彿とさせる木簡の出方である。

その中では8はやや異質の内容で、役人の履歴書風の記載がある。干支年と年号を併記しながら、大宝三年(=癸卯年。七〇三)に宮内省に出仕してから、慶雲四年(=丁未年。七〇七)に親の喪(孝服)にあつて、一時辞職するまでの経歴が書かれている。

六・七頁の木簡は、第一次大極殿院東南隅と内裏外郭西南隅に挟まれた谷部から出土したもの。大極殿院回廊周辺の整地土の木簡と違い、造営直前の地表面と整地土の間に堆積した建築用材の破片や、はつり屑、檜皮などの中に含まれていた。

和銅二年(七〇九)年から和銅三年(七一〇)までの年紀をもつ木簡を含み、第一次大極殿院の整地土の木簡と同様に、第一次大極殿院から内裏外郭にかけての地域の造営過程を知ることができる資料である。

荷札木簡が多いという点は、大極殿院の整地土の木簡と共通した性格をもつが、米のほかに、6の軍布(海藻へワカメ)の古い表記で、隠岐国の木簡に顕著にみられる)や18の塩など、多様

綾郡宇治部里宇治部阿弥俵



12

(右側面) 車持若麻呂
(裏) 車持若麻呂



13

淡淡河推推糧霜
推海梅推海物物護讓



7

(表) 鶴甘部郡穂郡越中国讚岐国
(裏) 津伎国針間国近江国



19



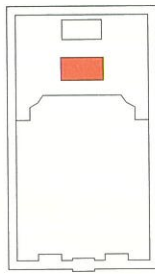
な品目がみられ、また削屑が含まれる点も様子が異なる。

大極殿院の整地土に伊勢国の米の荷札がまとまっていたように、この地域でも同じ郡の荷札がまとまる傾向がある。15の丹波国水上郡はその一例。これらは同じ地域から納められた米が一括して保管されていたことを示すとともに、役民の出身地とも関係があるかも知れない。

17の「不知山」(いさやま||諫山)、18の大鹿部(おおかべ||大壁)、19の針間(はりま||播磨)や穂(ほお||宝飯。後に宝飯)など、音仮名や訓仮名を自在に用いた地名表記も特徴的で、和銅六年(七一三)に意味の良い漢字二文字を用いるようになるより前の、実際の地名表記がわかる貴重な資料。

7は「千字文」という「論語」と並ぶ手習い用テキストの一節が書かれた木簡。整地後に建物を建てる際に柱穴に入ったもの。

<調査回数>
 第69次調査(1970年)
 第72次調査(1971年)
 第295次調査(1998年)



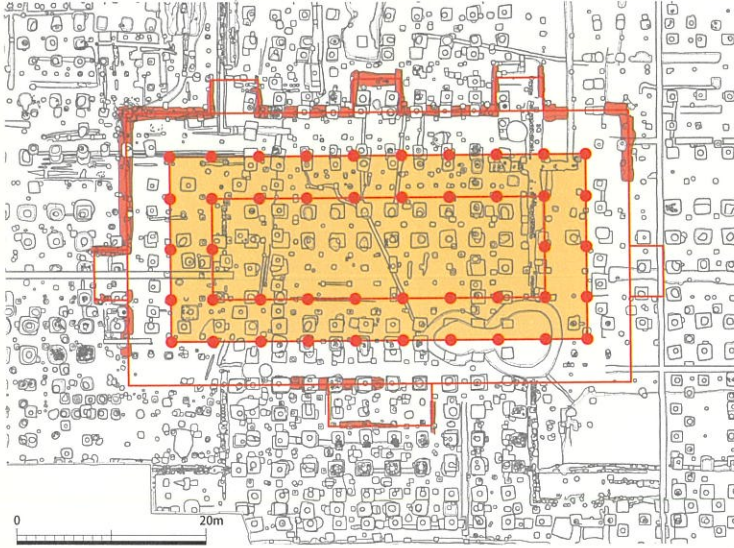
第一次大極殿

大極殿院の中心、その名も北極星にちなむ一

大極殿とは

大極殿とは、即位や元日朝賀といった国家的儀式や外国使節の謁見の際に、天皇が出御する建物である。建物内には高御座が据えられ、南側に立ち並んだ臣下を見下ろした。この大極殿は中国の制度にならって建てられ、その名も宇宙の中心である北極星(太極星)に由来する。

平城宮大極殿の使用が記録上最初に確認されるのは、遷都から遅れること五年、和銅八年(七一五)の元日朝賀である。この建物は藤原宮の大極殿を移築したと考えられており、そのために完成まで時間がかかったのだろうか。



第一次大極殿遺構平面図 (■ 地覆石据付・抜取痕跡、■ 建物の規模、● 柱推定位置)

基壇規模推定の決め手となった地覆石抜取痕跡

大極殿解体時に、基壇外装最下段の地覆石を抜き取った痕跡。幅40~50cm、深さ15cmと残りがわずかであった。



西面の地覆石抜取痕跡 南から



第一次大極殿の遺構 建物の西半分。人は柱の位置。北西から

第一次大極殿の発掘調査

第一次大極殿に調査のメスが入ったのは一九七〇年のこと。建物東半分にあたる部分の調査であった。ただし、この時点で当地は奈良時代前半の内裏として認識されており、磚積擁壁や奈良時代後半の総柱建物群など、予想外の遺構の出現に混乱していた様子が記録されている。

その後、一九九八年には建物の西半分を広く発掘調査し、大極殿の全面の様子が明らかになった。とはいえ、出てきた遺構は基壇外装に使われた地覆石の据付痕跡と抜取痕跡の溝のみ。基壇そのものや礎石などは、奈良時代後半の建物群や後世の開発によってすっかり失われてしまっていた。

しかし、この溝を手がかりに、大極殿の大きさや構造を推定することができた。基壇は東西五三・二m、南北二八・七mで、階段が南面中央に一基、北面に三基、東西中央南寄りに一基と一つ。そして、柱の位置も、北面と東西面の階段の幅から、東西九間、南北四間(身舎は東西七間、南北二間)の建物と考えられている。



復原された第一次大極殿

二〇一〇年、平城遷都一三〇〇年祭にあわせて復原された。内部には、天皇の玉座である高御座の実物大模型と、復原に関する展示がある。



鬼瓦

鬼の全身を表した1式Aとよばれるもの。大極殿院の建物のみならず、奈良時代前半の平城宮では全般に、この型式の鬼瓦が採用された。

軒丸瓦（上）と軒平瓦（下）

大極殿院のために創案された軒瓦の組み合わせ。平城遷都が決まってから、まもなく生産が開始された。

大極殿に葺かれていた瓦の色

大極殿院の建物に葺かれていた軒瓦は、平城宮の他所の瓦よりも黒味が強い。唐長安城の宮殿の瓦は黒色で表面が磨かれており、それを模倣したと言われるが、実際には残念ながら似て非なるものになっている。



ひがし ろう
東 楼 <調査回数>
第77次調査 (1973年)

奈良時代前半の内裏の南方と想定して始められた発掘調査で、予想外に現れた総柱建物。あまりにも大きい掘立柱抜取穴（柱を抜くために掘られた穴）は、当初井戸かと誤認されたほどだった。

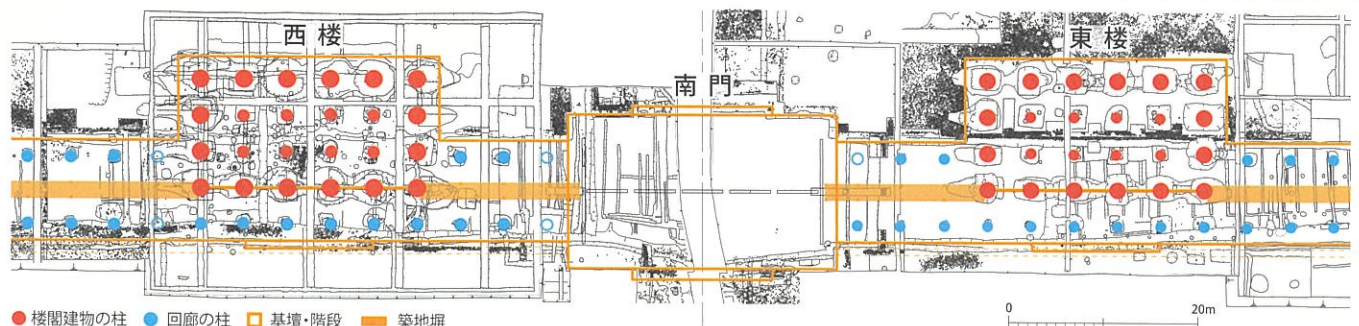
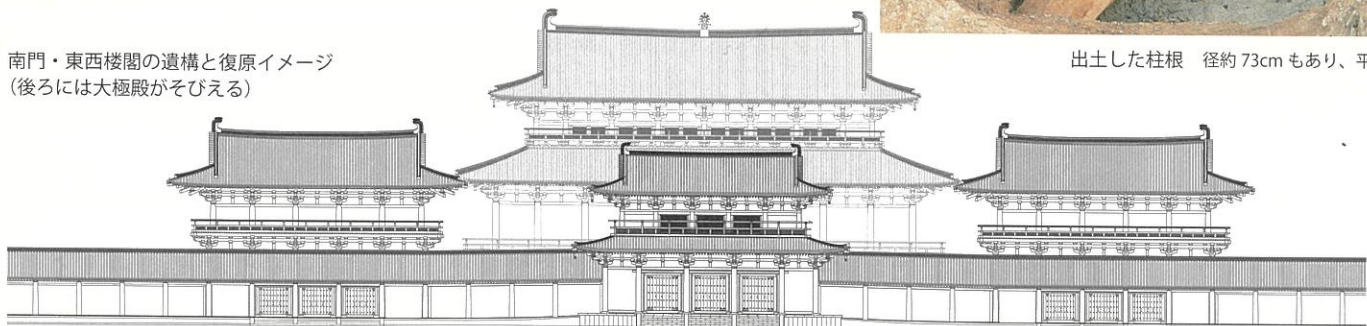


出土した柱根 径約73cmもあり、平城宮で最大



楼の遺構 東から矢田丘陵を望む。奥には平城宮跡資料館、現在の研究所（当時は県立奈良病院）がみえる

南門・東西楼間の遺構と復原イメージ
(後ろには大極殿がそびえる)



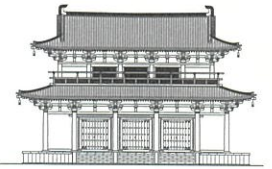
● 楼間建物の柱 ● 回廊の柱 □ 基壇・階段 ■ 築地塀

南 門

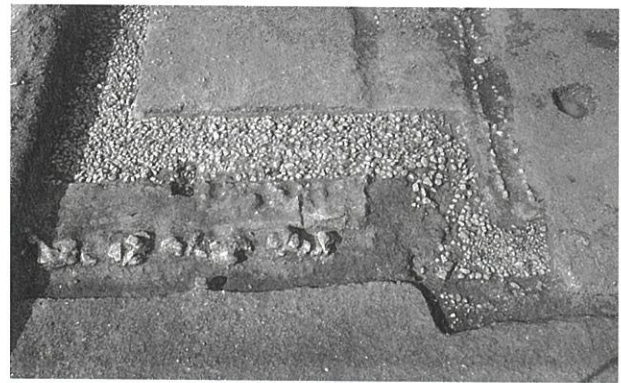
<調査回数>
第77次調査 (1973年)
第389次調査 (2005年)



単層案 (東西5間×南北2間)



重層案 (東西5間×南北3間)



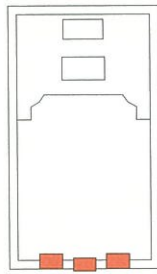
南門北面階段の地覆石と外側に広がる礎敷き 南から南門の遺構は、ほとんど全て失われていた。残っていたのは基壇外装の一部である地覆石の抜取痕跡、階段の痕跡、雨落溝、掘込地業などに限られる。これらの少ない情報から建物を復原するために、現在、単層か重層か、さまざまな議論を重ねている。

儀式にも使われた正面建物群
南門は、大極殿院の正門であるとともに、天皇が出御し叙位や饗宴がおこなわれる場でもあった。発掘調査で検出されたわずかな遺構から、基壇の規模は東西約二・四m、南北約一・六・三mの礎石建ち建物に復原される。

※本頁中の建物立面図は(財)文化財建造物保存技術協会作図のものの一部改変

なんもん とうざいろうかく
南門・東西楼閣

大極殿院の正面を荘厳した一



にし ろう
西 楼

<調査回数>
第 337 次調査 (2001・2002)

南門をはさんで、東楼と対称の位置にあるとみられた西楼。予想通り現れた巨大な掘立柱抜取穴からは、多彩な遺物が出土した。

「高殿」(楼閣)と書かれた木簡

里工作高殿料短枚桁二枚



20は「高殿」の部材名(短枚桁)と数量が見える木簡。「造東高殿飛驒工」「西高殿四人」と書かれた木簡もあり、東西楼閣の増設に関わる資料。大極殿院東を流れる中央幹排水路の楼閣より下流(南)にある堰状部分から出土。



西楼の遺構 人は柱の位置。北西から長屋王邸跡を望む



掘立柱の抜取穴に捨てられていた礎石

東西楼閣の建物は、内側の柱を礎石建ち、外側の柱を掘立柱とする。内側と外側では柱の太さが異なり、外側のものは屋根の荷重を直接支えたため巨大であった。

楼閣は後からつくられた

遷都当初、大極殿院に楼閣建物はなく、途中で、南門の両脇の築地回廊を一部解体し、楼閣建物が増設されたことが、発掘調査によって明らかになった。その時期は、出土木簡から、天平3年(731)頃とされる。



東西楼閣は、王権の威信を示す高層建物であるとともに、特別な儀式の場としてもつかわれた。発掘調査によって、基壇の規模は東西約二七・六m、南北約八・九m、東西五間、南北三間の、礎石と掘立柱を併用した重層建物に復原される。大極殿院の他の建物は全て礎石建ちであるなか、きわめて特殊な構造といえる。

東西楼閣に葺かれた瓦

掘立柱の抜取穴には、葺を飾った瓦が捨てこまれていた。そのなかで、組物の隅木の上に葺かれた隅木蓋瓦(前列2点と中列左3点)は、重厚でありながら流麗な文様をもつ。往時の壮麗な楼閣建物を偲ばせる資料である。





ちゅうぎ
箸木 (西楼)

用を足したとき、おしりを
拭う木切れ。
(長さ約 16 ~ 22cm)



食膳具・容器 (東楼・西楼)

箸、杓子、角鉢
(杓子の長さ 31.6cm)

種類豊富な木製品

遺物のなかで、特に目立つのが木製品。
箸や杓子などの実用品から祭祀関連の
ものまで、実に多彩。東西楼閣あわせ
て約 2500 点出土している。



西楼の柱抜取穴

東西楼閣の掘立柱抜取穴から 出土した遺物

大型の高層建物であった東西楼閣。解体時、掘立柱を抜き取る
ために掘られた穴もまた巨大なものであった。穴の大きさは南
北幅 3.5 m、東西幅は 6 ~ 9 m と細長く、深さは 2.4 ~ 3 m と、
据えられていた柱の巨大さを物語る。

この抜取穴からは、木製品、土器、瓦、木簡など、さまざまな
遺物が数多く出土した。楼閣は西宮が造営される頃、解体され
たことが分かっている。抜取穴から出土した遺物は、解体時お
よびその直前の国家の中核の様相を示す貴重な資料である。



有孔小円板 (東楼)
紡錘車 (糸紡ぎの用具) か。
(径 4.1cm)

土器類 (東楼・西楼)

主に須恵器・土師器の食器や須恵器壺が出
土した。楼閣の警備にあたった兵士が使用
したものか。須恵器転用硯 (前列右)、土
師器灯明器 (中列手前左) があるのも特徴。



鬼瓦 (東楼)

鬼の顔面を表現したIV式Bと
呼ばれるもので、東西楼閣が建
っていた時期よりも新しいとみら
れる。廃絶の時に他所から紛れ込
んだのだろうか。



建築部材の雛形 (東楼)

組物くみもの (柱の上にあり軒を支える部分) のミニチュア。部材の内容から、三段階で軒を支える「三手先」だったことがわかる。実際の建物寸法の10分の1で作られている。建物の雛形が、東楼内に安置されていたのかもしれない。



鳥形 (東楼)

鳥は動物の形代の中でも、ポピュラーなものひとつ。(長さ 5.8cm)



さまざまな祭祀具

人や鳥、刀をかたどった形代や、地面に刺して結界を示したとされる齋串が見つかっている。一口に「祭祀」といってもその用途・目的は様々である。

人形 (東楼)

よくみると、おへそまで描かれている。(長さ 15.7cm)



檜扇 (東楼)

重ねると先端が丸く弧を描くよう加工されている。(長さ 30.4cm)

齋串 (西楼)

西楼の柱抜取穴から多量に出土した。いずれも、上端は一方向から斜めに切り落とし、下端は尖っている。このタイプの齋串は、建物の廃棄・解体時に伴う祭祀に使われたのではないかとされている。(長さ約 26 ~ 30cm)





27

(裏) 丸□夫天文 丸子豊 丸子刀千
丸子豊宅丸子豊額丸子友注丸子友依
丸子□□
丸子広宅丸子大田而 丸子豊宅 宅宅宅宅宅

(表) 天平勝宝□年□□月二日合



33

(表) 大園守四人 □□
(裏) 大殿四人 右五人
々々々々



衛門府

34



授刀所 小竹七

29



37

(表) 應修理正倉□
(裏) 右「肥後国 山鹿郡 妙法 蓮華」

東西楼閣の掘立柱抜取穴からは、木簡も多数出土した。東楼は天平勝宝五年（七五三）、西楼は天平勝宝四、五年の年紀のある木簡を含む。内容にも共通性があり、東西の楼閣がこの頃同時に解体されたことがわかる。

なお、第一次大極殿跡地に建設された西宮の南限は、楼閣のあった南面築地回廊部分よりもずっと北に位置しているため、東西楼閣の解体時期は西宮造営開始の直接の指標とはならない。

十四頁は東楼の掘立柱抜取穴、十五頁は西楼の掘立柱抜取穴の木簡である。東楼・西楼とも、門や大殿（33）などの警備の分担記録など、宮城を守る兵士に関わる木簡が多い。役所名としては、28・34の衛門府、29の授刀所（近衛府の前身授刀衛に連なる機構か）、25の右兵庫（兵器の保管を担当）のほか、左衛士府も見える。

現業部門ばかりでなく、下級役人の事務作業や生活を示す木簡もある。西楼からは、兵士の名簿に由来するとみられる端正な楷書の人名の削屑が多数見つかっている。30は、日常の事務作業に伴う文書を巻き付けた題籤軸の断片。天平十九年（七四七）から使い始めたことがわかる。

27は陸奥国とのつながりの強い丸子姓の人名を列記した木簡の余白に文字



36

(表) 飯二升許乞 従
 右先日乞
 更下□□白□□
 (底) □□常食菜甚悪 (外)
 (裏) □□末□□



28

(表) 衛門府 進鴨九翼 風速小月 大石小山 大豆入成
 辟田麻呂
 (裏) 天平勝寶四月廿七日



26



31

納片兒

此所不得小便



30

天平十九年 (題籤軸)



25

□右兵庫

の練習をしている。36は報告書の下書きのような木簡で、最後に支給された給食に対する不満を記す。「常食菜甚悪」は、おかすがまずい、というつぶやきである。果たして彼はこの通りのことを報告したのだろうか？

26は日本最古の小便禁止の看板の木簡。大極殿院や西宮という中樞区画に常時掲示されていたものとは考えにくく、兵士または楼閣解体の作業に従事した役民向けの注意書きか。

37は「修理正倉」「肥後国山鹿郡」「妙法蓮華」と読めるが、衛府との関係は明らかでない。「妙法蓮華」は墨で抹消されている。

31の「片兒」は「諸兒」に対するカタコの意で、一對のサケの卵の片方のことか。28の鴨とともに、衛府が天皇の食料、贄の調達に携わることと関連する。28は日付を書き損なったため(年が抜けている)、使用されずに捨てられたらしい。

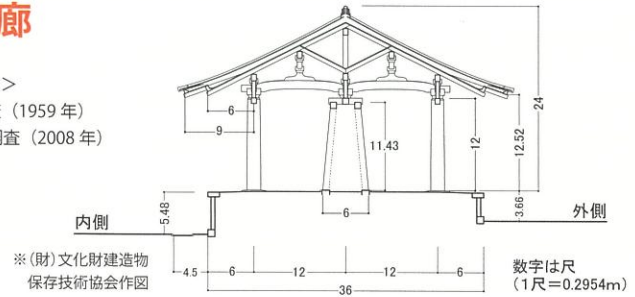


かいろう ひろば 回廊・広場

聖域を構成する線と面一

回廊

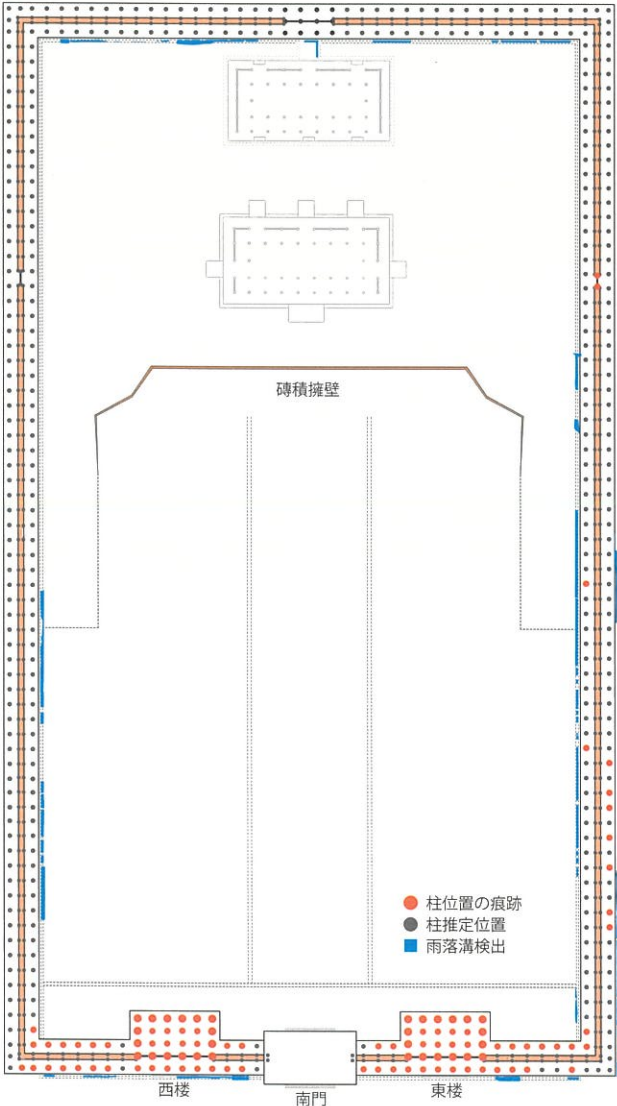
<調査回数>
第2次調査（1959年）
第438次調査（2008年）
等多数



回廊復原案（平成14年度）

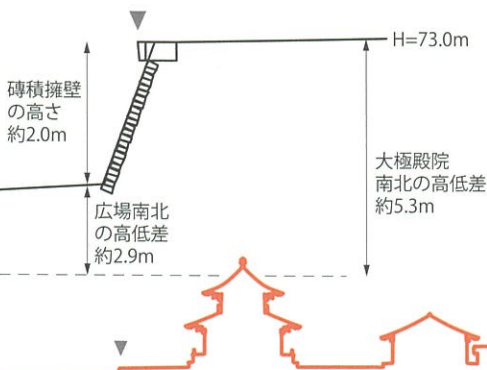
復原された回廊の姿

大極殿院の他の建物同様、回廊遺構の大部分は失われていた。残されていたのは、一部の基壇土、側柱の礎石抜取痕跡、雨落溝、掘込地業と限られる。復原される基壇の幅は約10.6m。築地塀をはさんで院の内外2.7mほどの幅の通路を人々が行き交ったことになる。



そびえたつ磚積擁壁

磚は最大7段しか残っていなかったが、当時は25段ほど積まれていた。使用される磚は短辺15～16cm、長辺約30cm、高さ約8.5cmと現在のレンガより大きい。積み方は、長辺を正面にして目地を1段おきにそろえる長手積みを基本とする。擁壁の屈折点では、隙間を作らないように斜めに打ち欠いたり、小口面が正面になるように積んだり、当時の職人の工夫を読み取ることができる。

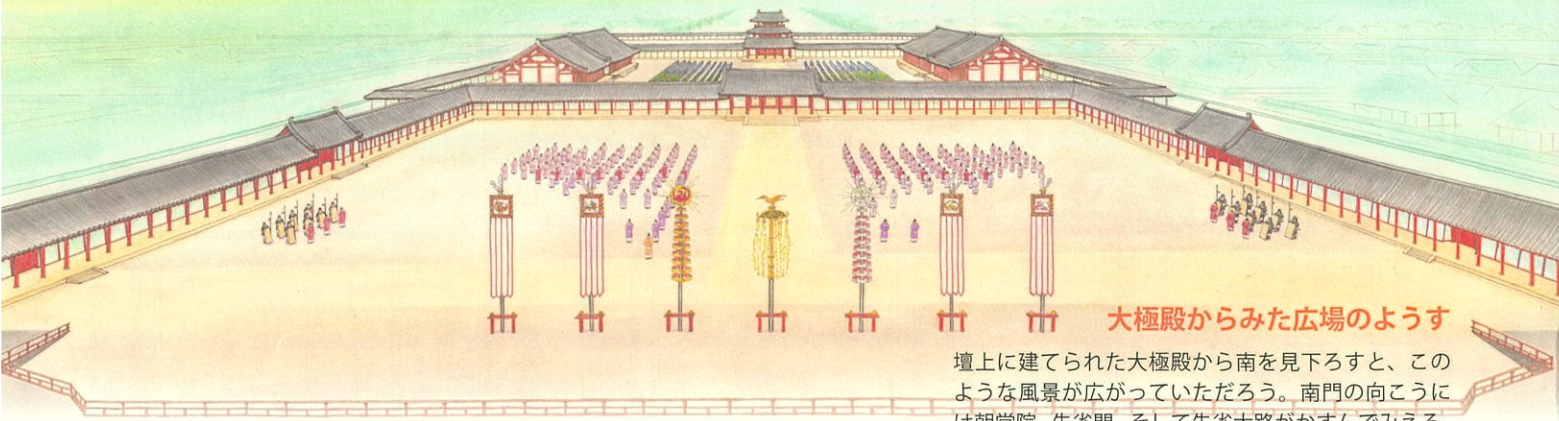


長大かつ重厚な区画施設

大極殿院を取り囲む区画施設は築地回廊とよばれ、中央が築地塀、その両側が通路になっている複廊形式をとる。宮殿建築において最高クラスの区画施設であり、奈良時代前半の平城宮では、第一次大極殿にしか採用されていない。

発掘調査によって、恭仁京遷都の際には、東西・西面回廊が解体・移設され、その空白を埋めるために掘立柱塀が設けられたことも判明した。その後、平城京に還都した際にも、築地回廊が再建されることはなかったらしい。さらに奈良時代後半の「西宮」造営と前後して、南面回廊と南門、東西楼閣は解体されてしまった。





大極殿からみた広場のようす

壇上に建てられた大極殿から南を見下ろすと、このような風景が広がっていただろう。南門の向こうには朝堂院、朱雀門、そして朱雀大路がかすんで見える。

(東西楼閣が増設される前の大極殿院、南門は単層案を採用)

イラスト：早川和子

広場

<調査回数>

第72次調査(1971年)

第75次調査(1972年)等

広場の礎敷き

奈良時代前半、広場内の舗装は3度やりかえられた。遷都当初は径5~10cmの礫、東西楼閣増設時には、南面築地回廊周辺に径2~5cmの礫、遷都前後には、径2cm以下の細かい礫。発掘調査員泣かせの仕事ぶりである。



一面に礎敷きが現れた。2009年、復原大極殿いまだならず

官人が立ち並んだ広大な広場

大極殿院は南に向かって緩やかに傾斜する空間であった。北約三分の一は一段高い壇になっており、壇の上には大極殿と後殿が南北に並び立っていた。壇の東西両端には斜道(スロープ)が設けられ、南側の空間へとつながる。この壇の南側は広場になっていて、儀式の際に五位以上の貴族が列立する空間であった。

壇の立上がり部分には、黒灰色の磚(レンガ)を積み上げた擁壁(磚積擁壁)が築かれた。磚積擁壁は高さ約2m、東西約一〇〇mにわたり直線的に伸びる大極殿の荘厳装置であった。

広場は、礫(小石)を敷き詰め、舗装されていた。発掘調査ではこの礎敷きが良好に検出された。当時の官人達が立ち並んだ地面がそのまま現れたのである。

磚状飾板

磚積擁壁付近で出土した。
壇上の高欄の礎石だろうか？



院内南北の高低差

最重要の儀式空間・第一次大極殿院を設ける場所として、高燥地である丘陵の支脈の上が選ばれた。高い部分は地山を削り、低い部分には盛土を施し、北から南に向かって緩やかに傾斜する地形を整えた。大極殿をもっとも高い場所に据えるための、入念な計画がうかがわれる。

H=67.7m

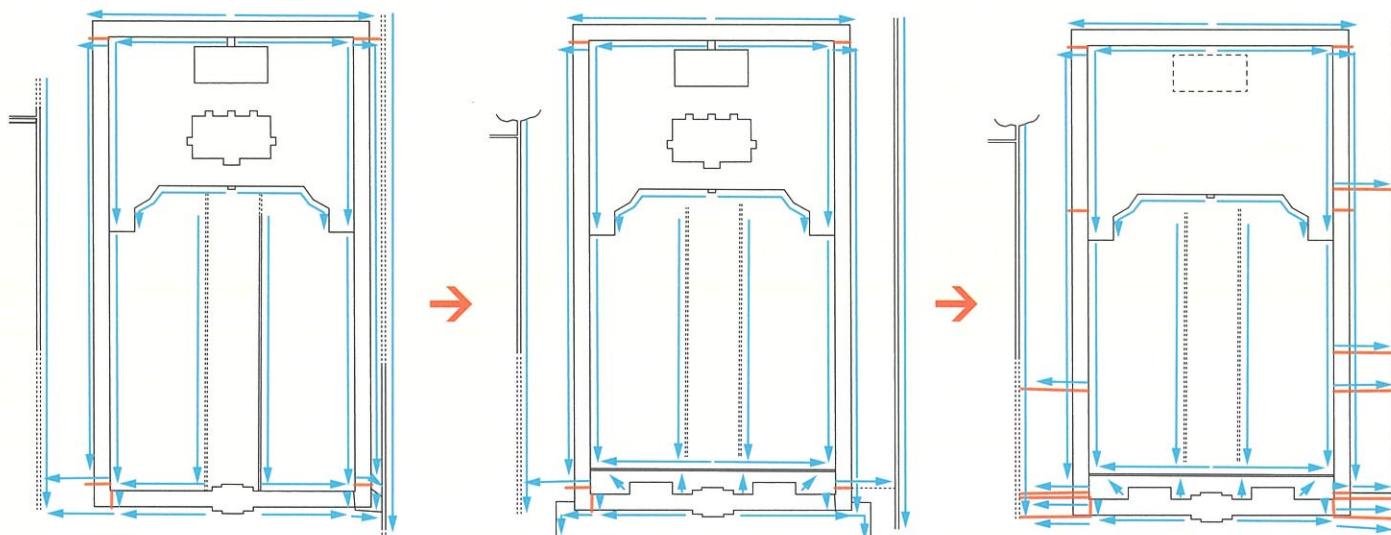
東西溝



広場の排水計画

儀式の場であった大極殿院にとって、排水は死活問題であった。発掘調査によって、当時の人々が排水工事に苦心した様子が明らかになった。

← 水の流れ
— 木樋暗渠（地下排水溝）



① 造営当初

北から南に下がる原地形を活かしたシンプルなもの。北からの水は、南面回廊の雨落溝へ集まり、東西に流れていく。

② 東西楼閣増設時

楼閣により南面回廊北雨落溝が機能不全に。代わりに東西溝を新設し北からの水を受け、溝南側の傾斜を南から北に下がるよう変更。

③ 恭仁京から還都後

東面・西面ともに新たに木樋暗渠を増設し、それぞれ基幹排水路まで接続。院外への排水の強化を図る。



木樋は最大7本連結されていた 西から若草山をのぞむ

頻繁におこなった排水工事

大極殿院は北から南に降るよう傾斜しており、基本的な排水の方向も南に流れるよう計画されていた。東西方向の排水も広場の中軸上が一番高く、東西へ振り分けられていた。院外への排水のためには、長い丸太を削り抜いた木樋を埋めた暗渠を設け、入念な排水計画が完成したかに見えた。

ところが、東西楼閣が増設された際に、大問題が生じたのである。南面築地回廊の北雨落溝が楼閣の基壇によって分断され、北から流れてきた水の受け皿がなくなってしまった。そこで、新たに排水溝を設けたり、地面の傾斜を変えるなどといった対応を迫られた。また、恭仁京から還都した後も、引き続き排水設備を強化している。大極殿の機能が失われてからも、当地が重要であったことの証左であろう。



掘立柱から木樋へ

暗渠に据えられ下水管の役割を果たした木樋は、最大で7mを越える長大なもの。しかし、なぜか不必要な長方形の穴があき、それをふさぐ栓がはめ込まれていた。実はこの木樋、前世は藤原宮の大垣の掘立柱とみられる。遷都の際に地上から地下へと転身を果たした。

大極殿院 周辺

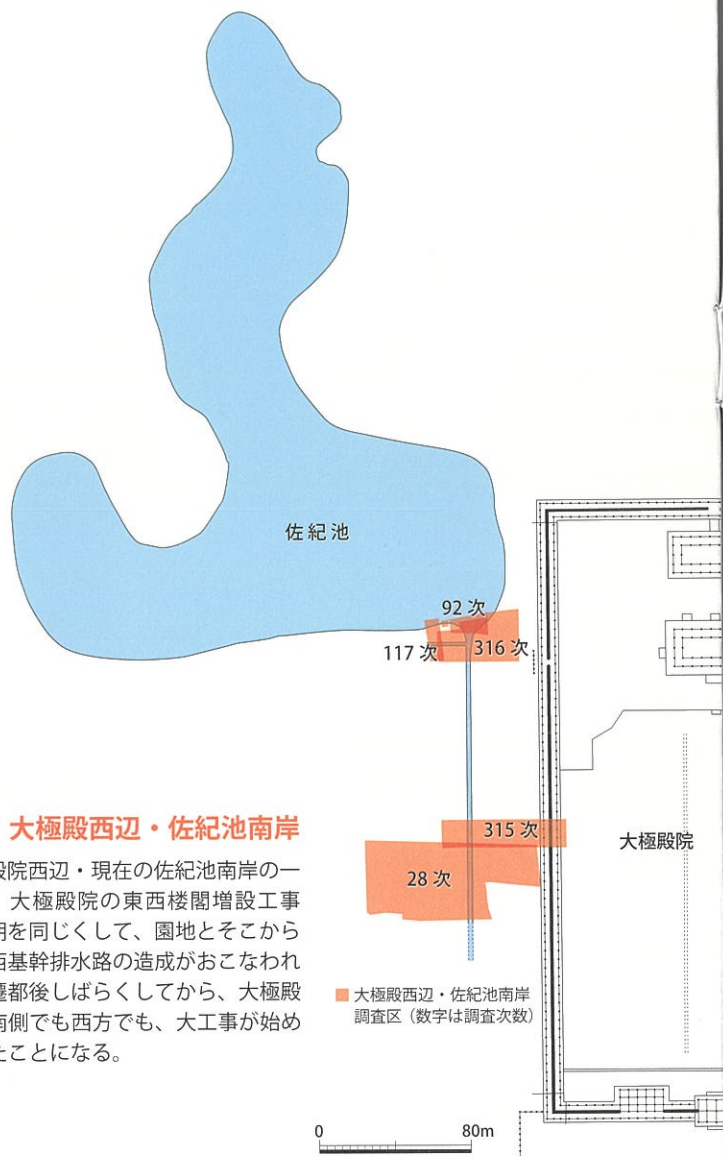
造成に造成を重ねる一

大極殿院北西辺は軟弱地盤

第一次大極殿院は、東西対称に整然と建物が配置された空間と考えられてきた。ところが、発掘調査の結果、西面回廊北寄りの遺構は想定位置よりも西側にずれ、遺構面の標高も東面回廊に比べて低いことが次第に明らかになった。検討を重ねた結果、この現象は第一次大極殿院の北西部が谷筋に当たり、平城遷都当初、その低い部分に最大で2mもの整地土を施し、平坦面を設けたためと判明した。整地土が軟弱であったために、時代とともに遺構が沈みこんでしまったわけである。



園地の築造に伴って敷かれた瓦敷き東西楼閣増設にともなう一部解体された南面回廊の瓦の可能性ある



大極殿西辺・佐紀池南岸

大極殿院西辺・現在の佐紀池南岸の一带は、大極殿院の東西楼閣増設工事と時期を同じくして、園地とそこから走る西基幹排水路の造成がおこなわれた。遷都後しばらくしてから、大極殿院の南側でも西方でも、大工事が始められたことになる。

幸せを呼ぶ!? 呪符木簡

病氣平癒が疫病除け祈願のまじない札とみられる木簡。表には四つ葉のクローバー状に人名「丈部若万呂」と呪句「天剛(あまご)」「北斗七星のこと」を、両側面には速やかな効果を願う呪句「急々如律令」を記す。厚さ19mmの分厚い柱目材で、裏面は未加工。材の大胆な使い方が目を引く。平城宮跡の呪符は珍しい。

(右側面) 急々如々律々令々

(表) 丈部若万呂 □河

天剛々々

丈部若万呂 天剛々々

丈部若万呂

丈部若万呂 熱□

天剛々々

長□

天剛々々

(左側面)

急々如々律々令々



大極殿院周辺の木簡



供御(耳)□糸十綯

38



(表) 但馬国二方郡波太郷
(裏) □□□□□五斗

59



伯耆国相見郡巨勢郷雜腊一斗五升 養老□年十月

50



參河国芳豆郡比莫嶋海部供奉四月料大贄黒鯛六(斤)

42

大極殿院西辺を南に流れる西基幹排水路やその西側の整地土、さらに大極殿院西側の谷筋に設けられた池（史料にみえる「西池」、今の佐紀池）からは、大極殿院造営時から東西楼閣増設時にかけての木簡が見つかっている。

門の警備や夜回りを担当した兵士の名簿や、その組織に関わる木簡がみられるほか、さまざまな荷札が出土しているのが目を引く。

42は參河国幡豆郡比莫嶋（今の愛知県南知多町日間賀島）から四月分の贄として届けられた黒鯛の荷札。内裏北外郭の土坑の木簡によって明らかになった、參河湾の篠嶋・析嶋（篠島・佐久島）による月交替の贄の貢進に、第三の嶋が存在することを裏付けた木簡。但し、比莫嶋からの貢進は、七二〇年代前後の限られた時期の臨時のものかも知れない。

50は伯耆国（鳥取県西部）からの雜腊（やまぎ）まな魚の干物）の荷札。59は但馬国（兵庫県北部）からの米の荷札。周辺からはこのほか、駿河国（静岡県中・東部）の堅魚、近江国（滋賀県）の米、美濃国（岐阜県南部）の麦門冬（ジャノヒゲの根を乾燥させた生薬）、若狭国（福井県西部）の塩・米、丹波（京都府北部）・播磨（兵庫県南部）・美作（岡山県北東部）・阿波（徳島県）・讃岐（香川県）の米などの荷札のほか、珍しいところでは38のような糸（供御）と



46

内舎人



41

○五十上子人列 十上□□□□



40



(表) 常陸那賀郡大伴部弟末呂 巳時
(裏) 入



(表) 尾張国造御前謹恐々頓首□
(裏) 頓火 火 火頭 布布□

56



47 忍勝火廿五人死一

天皇用を明記する)・布・帳や薦などの調度品の付札も出土している。

47の火は、兵士十人を単位とする組織。忍勝はその責任者火長(頭)である。41の五十上・十上もそれぞれ五十人、十人を単位とする兵士集団の統率者。

56は尾張国造宛に火頭が書いた手紙の習書か。「某御前(白)」として冒頭に宛先を記す七世紀に顕著な書式の木簡。

40は兵士(兵衛または衛士か)の勤務管理に関わる木簡で、「巳時入」は、巳時(午前十時頃)に勤務に就いたことを示すか。

46の内舎人は、天皇のそばに使える従者。貴族の子・孫から選ばれる。付札状の形態をとるが、その機能は未詳。

II 西宮さいぐうの時代

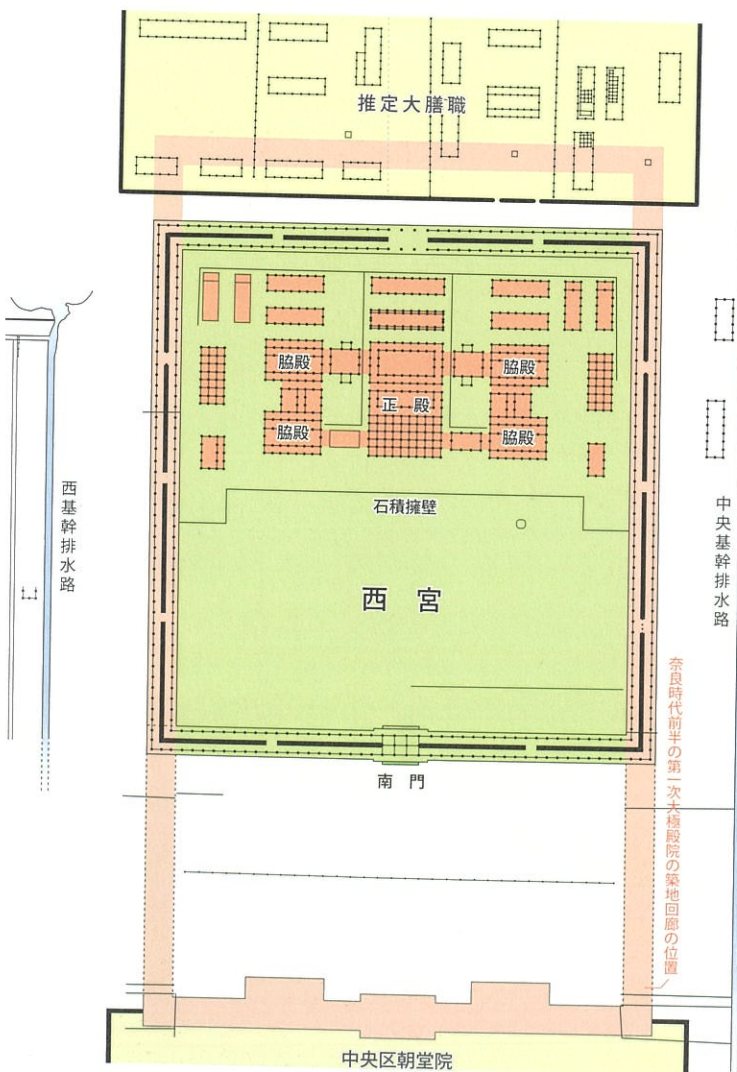
天皇のすまいとして変貌をとげた空間

西宮の復原イメージ

第一次大極殿院とは打って変わって、檜皮葺き葺棟で白木の柱からなる掘立柱建物が建ち並ぶ。天皇のすまいとして通有の、日本古来の建築といえる。

西宮の遺構配置図

南北 186.1m、東西 176.6m の正方形に近い区画へ変更している。隣り合う内裏の区画と同規模であり、強く意識して設定されたに違いない。



「西宮」とよばれた宮殿

天平十七年(七四五)の遷都後、大極殿院の機能は東隣の地区へ移された。これが第二次大極殿院である。第一次大極殿院の建物は解体されるとともに、新たな宮殿へと造りかえられた。まず、第一次大極殿院の区画の南北を狭め、北側の壇上に

は掘立柱建物が立ち並ぶ空間を、南側の壇下には広場を整備した。これが『続日本紀』などにみえる「西宮」と呼ばれる宮殿で、のちに称徳天皇がここを内裏として使用したのである。

実は長年、「西宮」の場所は定かではなかった。あるが、二〇〇四年、この南側に広がる中央区朝堂院(ちょうどういん)で、称徳天皇の大嘗宮(だいじょうみやう)年(七六五)の遺構が発見されたことが決め手となった。

神護景雲四年(七七〇)、称徳天皇はこの宮殿で息を引き取った。西宮は平安時代初期、平城太上天皇によって再び整備されるが、それまでの間の具体的な利用の実態は不明である。

瓦は大棟の部分のみ

西宮の建物は、発掘調査で掘立柱建物と明らかになった。しかし、瓦も出土する。総瓦葺きの屋根は礎石建物でないと構造的に支えきれない。瓦の出土量も多くはなかったことから、大棟にのみ瓦を葺いた葺棟と推定するに至った。



いらかなね ひわたさき
葺棟・檜皮葺の屋根
朱塗りの柱に総瓦葺の第一次大極殿とは全く異なる色彩を放つ（写真は平城宮内裏の復元建物模型）



イラスト：北野陽子



軒丸瓦（上）と軒平瓦（下）
西宮の屋根の頂部を飾った軒瓦。

たてぐし 竪櫛（中央基幹排水路）

現在よく目にする横櫛とは違い、縦長で上と下両方に歯がついている。（現存長 20.4cm）



ものさし（西基幹排水路）

目盛は、一寸および五分ごとに墨線でつけられている。（現存長 14.8cm）



法隆寺所蔵百万塔

ひやくまんとう 百万塔未成品（西基幹排水路）

相輪や経典をはめ込む孔があいていないため、未成品であることがわかる。宮内からはこの塔身部の他に、笠の断片とロクロ挽きした際の残材も見つかっている。

百万塔は、天平宝字 8 年（764）の藤原仲麻呂の乱の直後に、称徳天皇が国家安寧を祈願し国家事業として製作させた。百万塔工房は、左右 2 つあったとされる。（現存高 14.3cm）

西宮の東西を流れる基幹排水路

西宮の区画の東西には基幹排水路が南北に走っている。これらは奈良時代前半から設けられており、浚渫や改修を繰り返しつつ、宮内の排水に大きな役割を果たしていた。ここからは奈良時代を通じて多くの遺物が出土し、特に種類豊富な木製品は目を引く。



棘甲羸交作鮑一榻

67



蒸鮑志籠 別冊貝

65



蠟三籠

61



薄鯪卅七斤 五編

60



64

(表) 西大宮正月仏 御供養雜物買殘銭
(裏) 一貫五百六十文 油五升 正月十六日添石前

中央基幹排水路の木簡

西宮の東方を南に流れる中央基幹排水路からは、1500点余に及ぶ木簡が出土している。溝の遺物は投棄場所から流されている可能性があるため、廃棄元の特定が困難な場合が多いが、中央基幹排水路の木簡は、出土地点ごとにある程度内容にまとまりが見られる傾向がある。

中央基幹排水路の両側の遺跡の様子は発掘調査でかなり明らかになっており、西側には、北から大極殿院（奈良時代後半には推定大膳職、西宮）、中央区朝堂院、朱雀門内側の広場空間が、また東側には内裏外郭官衙、東区朝堂院西辺官衙、兵部省（奈良時代後半のみ）が展開していた。中央基幹排水路の木簡は、これらの施設の性格を考える大事な資料となる。

64は西大宮（西宮）で行われた正月仏事の用度を購入した残りの銭の付札。中央区朝堂院の南端に近い位置で、中央基幹排水路から枝分かれた南北溝から出土した。

60、63、65、72は、食品名が書かれた木簡。貢進者が書かれていないため、保管用のラベルの木簡と見られてきたが、志摩国の贄の可能性が提起されている。61、65、68のような下端を失らせたもの以外も、贄の荷札の可能性があらる。

このうち60、63、65、69は、大極殿院東南隅に近い位置の中央基幹排水路のほぼ同位置から出土した。神護景雲三年（七六九）の年紀のある称徳天皇の時代の木簡と一緒に出土していることから、西宮で消費された食品の付札とみられる。71はこの地点で大極殿院側から流れ込む東西溝との合流点付近で出土したが、一連の遺物とみられる。



角俣

72



雑魚腊

68



雑魚楚割一籠

66



熬海鼠

71



押年魚上

62



伊知比古

69



鹿六

63



水母二斗三升

70

60は薄鯢(鮠)の付札。重さ三七斤(約二五kg)の薄切りのアワビを五束に梱包する。

61は鱈の腊(干物)三籠分の付札。

62は年魚(鮠)の押しずしの付札。

63は鹿肉の付札。木簡にみえる肉は、ほかに猪・雉・鴨・鶏がある程度で珍しい。

65は、蒸鮑(鮑)一籠分、三〇個の付札。貝殻付きで、「貝」を単位として数えている。

66は雑魚の楚割(細長く短冊状に切って乾した干物)一籠の付札。

67は、棘甲贏(ウニ)と和えた「交作」は「ませつくり」、和えること)鮑の付札。「堀」は土器の単位。

68は雑魚の腊の付札。

69の「伊知比古」はイチゴのこと。イチゴの見える木簡も珍しく、付札はこれ一点しかない。

71は、イリコの付札。イリコは海鼠(ナマコ)を干したものの。

70は中央基幹排水路の南端の、兵部省南西隅に近い位置で出土した。クラゲの付札。容積で計量している。

72は中央基幹排水路の西側、西宮との間の土坑から出土した。ツノマタの付札。ツノマタは紅藻類の一種。鹿角菜にもツノマタの訓があるが、区別されている。

III よみがえる威容

研究の積み重ねにより姿をあらわした一三〇〇年前の雄姿

復原のための手がかりは—

基壇から上の部分が失われていた建物を復原するために、様々な情報が集められた。最初の手がかりとなるのは、第一次大極殿の遺構や出土遺物。第一次大極殿を移築した恭仁宮大極殿の遺構の情報も参考にした。また、各種史料、『年中行事絵巻』などの絵画資料、現存する古代建築からも重要な情報を得ることができた。

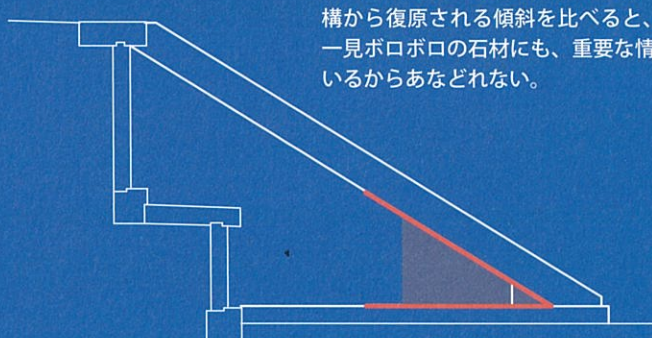
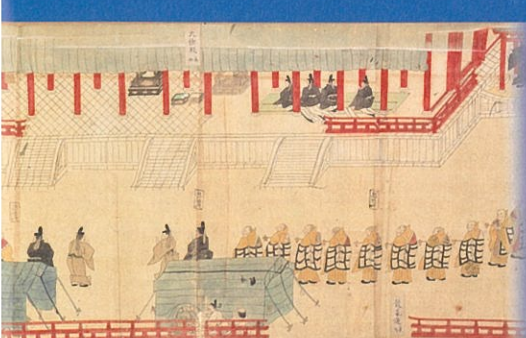
瓦

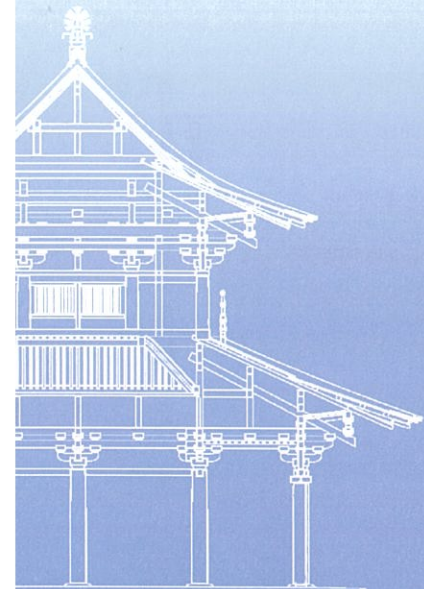
瓦ほど親切なものはない。第一次大極殿の建物を構成する要素の中で、ほぼ唯一、本来の姿のまま、比較的少量に出土するからである。復原する第一次大極殿の屋根には、出土瓦の文様と寸法を忠実に復原したものを葺けばよいはず…。それが、悪戦苦闘するはめに。葺き方まではわからないし、古代人の手作り瓦の寸法には案外バラつきがある。結局のところ、平均的な値と雨漏りしないような瓦葺の間隔から逆算して、復原瓦の寸法が決定された。残りが良くても、復原は簡単ではない。

遷都一三〇〇年にあたる二〇一〇年に、第一次大極殿の復原建物が完成した。完成に至るまでには、膨大な量の復原研究が積み重ねられた。それは、建築史のみならず、考古学（瓦、金属製品等）、美術史（彩色、絵画等）、日本史など幅広い分野にわたる。本展示ではその一部を紹介する。

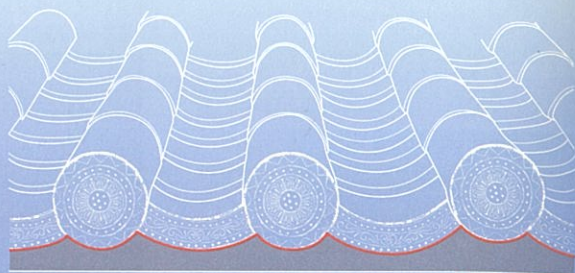
階段

第一次大極殿の階段の幅は、遺構から推測することができたが、今度は傾斜がわからない。隣の第二次大極殿の発掘調査では、三角形の凝灰岩が出土し、階段の羽目石かと思われた。この石の角度と、移築先の恭仁宮大極殿の階段遺構から復原される傾斜を比べると、ほぼ同じ。一見ボロボロの石材にも、重要な情報が潜んでいるからあなどれない。





五重美多軒
 所重因内觀
 二進義馬氏



建物の構造

遺構がわずかにしか残っていなかった場合、その建物が単層か重層かをどうやって決めるのだろうか？『続日本紀』によると、平城宮には「重閣門」（重層門）があったらしい。となると、より格の高い第一次大極殿は当然重層だったと考えたくなる。平城宮の周囲を見渡しても、大寺院の中心建物たる金堂は、重層か単層裳階付き。どちらも屋根は二重だ。これらを踏まえると、第一次大極殿が重層建築であったと考えるのが自然であろう。

彩色

軒平瓦の凸面に走る一本の朱線。ともすれば見落ししそうになるこの情報から、建物の彩色が復原できる。

というのも、瓦を屋根に葺いた後に柱や部材に丹塗りを施したために、瓦座とよばれる部材と接する軒平瓦にも、丹が付着してしまったというわけだ。



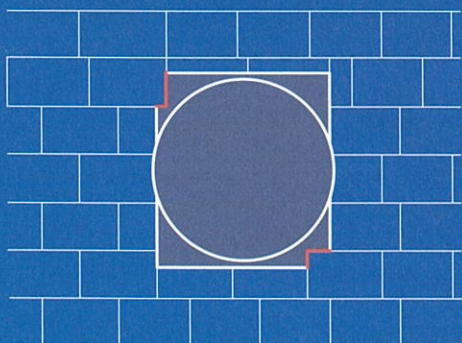
扁額

古代寺院の金堂や平安宮では、殿舎と門とにそれぞれ名を記した扁額がかけられることが一般的であった。第一次大極殿の扁額はもちろん出土していないし、古代の扁額の現存例も非常に少ない。ところが、山田寺（奈良県桜井市）の発掘調査で、南門付近から出土した雲形の木製品が、検討の結果、扁額の脚部である可能性が高まった。これが第一次大極殿にもっとも近い時期の扁額というわけで、肩と脚部の意匠に採用された。



礎石と敷石

第一次大極殿の発掘調査では、礎石がすべて抜き取られてしまっていることがわかった。そこで、移築先の恭仁宮大極殿に目を向けると、これが情報の宝庫であった。礎石の隅をよくみると、意味ありげな欠き込みが二か所ある。これは基壇上面の舗装を反映していると考えた。こうして、年中行事絵巻にみられる平安宮大極殿とは異なり、磚を建物と平行に敷き並べた「布敷」を採用したのである。



年中行事絵巻 巻七御齋会
 (所蔵田中家・画像提供中央公論新社)
 上の建物が平安宮大極殿
 (「四半敷」の舗装がみえる)

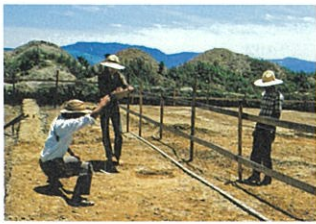


IV 大極殿院発掘調査史×奈文研のあゆみ

五〇年にわたる第一次大極殿院発掘の過程と、奈良文化財研究所の歴史をふりかえる

「第一次内裏」としてー

現在の第一次大極殿院地区に、奈良時代前半の内裏があると認識されていた時期



平城宮第75次調査の測量風景
調査区に杭と貫板を設置して水系をめぐらせ、水平距離を測る「遠方測量」である



平城宮第2次調査の作業風景
掘った土をベルトコンベアーでなく、トロッコで運んでいる

1967



回廊の出現
この地区が築地回廊で囲まれていたことが判明

1959



平城宮第一次大極殿院周辺に初めて調査のメスが入る(平城宮第2次調査)
写真は、鍬入れ式のようす

1960

1963 平城宮跡国有化の方針決定、国道バイパスの宮跡東部通過計画浮上

1962 平城宮跡内での車庫建設問題から、全国的な保存運動がおきる

1952 平城宮跡が特別史跡に



1955 平城宮第二次大極殿院回廊東南隅(平城宮第1次調査)
このとき、現地説明会のはしりとなる「現地見学会」を開催する

1954 唐招提寺を皮切りに南都諸大寺の調査開始

南都諸大寺

等の調査研究

1952



奈良文化財研究所設立(春日野町旧庁舎)

1954 奈良国立文化財研究所と改称



1966

平城宮は東側に張り出すことが判明

1964 平城宮造酒司

1964～66 平城宮朱雀門、北面築地など宮城四至の確認

1963

平城宮跡発掘調査部発足



1956～59 飛鳥寺、川原寺、飛鳥板蓋宮伝承地など、飛鳥地域での発掘調査開始(写真は飛鳥寺 中門と南門の発掘)

宮都の発掘調査、はじまるー

1978

山城国分寺金堂跡（恭仁宮大極殿）
の発掘調査



1978 平城宮第二次大極殿の発掘調査
恭仁宮大極殿よりも規模が小さいと判明



1975～78
内裏検討会
第一次大極殿の場所の模索

ここに内裏はなかったー

調査成果の蓄積により、第一次大極殿の場所の確定と「第一次内裏」の存在の否定がなされた時期



1970 予想しなかった磚積擁壁や「西宮」の総柱建物の出現

1982



第一次大極殿院地区で、初の報告書刊行



1973 東楼・南門の出現
推定第一次内裏の南方から、予想外の建物の出現



1971

徹底的に破壊された大型建物の存在を認識
これがのちに第一次大極殿とわかる

1980

1980 明日香特別立法公布

1978 「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」(文化庁)完成
以後、野外博物館としての整備の進行

1970

1968 平城宮跡を迂回する
国道バイパスルートの決定

1968 平城宮東院庭園の存在を確認



1984～86 平城京右京八条一坊十三・十四坪 鑄造工房発見

1976 この頃より平城京城の大規模発掘の増加

1976～1982
平城宮中央区朝堂院



1973 平城宮内裏石敷井戸

1970 「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策」閣議決定

1970

平城宮跡資料館開館



1971 薬師寺金堂

1965 遺構展示館開館

考古科学分野の充実ー

1974 埋蔵文化財センター発足



1978 大官大寺塔

1972
全国の遺跡への調査整備
指導本格化

全国各地の
遺跡を視野にー

1973 飛鳥・藤原宮跡発掘調査部発足



1969 藤原宮南面中門（藤原宮第1次調査

1969 遺跡・遺物の保存科学研究の開始

1980 美術工芸研究室を奈良国立博物館へ移管

1980 本庁舎が二条町に移転

1975 飛鳥資料館開館

第一次大極殿院 としてー

発掘調査が一段落し、復原整備に向けて動き始めた時期



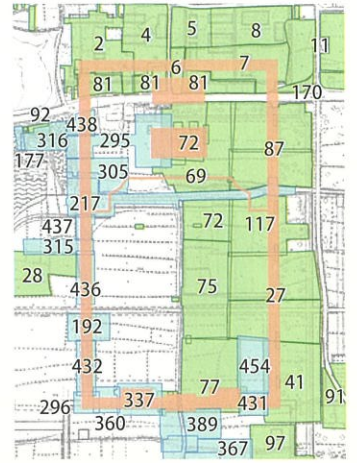
1996 第一次大極殿の10分の1模型作成
(現在奈良市役所にて展示中)

1993

第一次大極殿院地区の復原整備が決定(文化庁)



1993 第一次大極殿院の100分の1模型作成



1980年までの既調査区
院内の東半をほぼ全て発掘した以降の調査は、西半の部分的な調査となる(数字は調査回数)

1989 平城宮第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査開始

1998

第一次大極殿の全貌解明に向けた発掘調査
規模が恭仁宮大極殿と同じであることが確定



1986 佐紀池南岸でクローバー呪符木簡を含む多量の木簡出土

1993 第一次大極殿復原建物の基本設計開始

1990

1989～2001 西隆寺

1984～90 平城宮東区朝堂院で3期分の大嘗宮の発見



1989 平城宮朱雀門

1989～90 平城宮式部省・兵部省
八省クラスの役所の実体が初めて判明



1987～98 頭塔

1995～2006 大乗院庭園

1997
～2000

飛鳥池遺跡で巨大官宮工房跡発見



1996 遼寧省文物考古研究所との共同研究開始

1993 アンコール文化遺産保護共同研究事業開始

1989

1986～89 長屋王邸
長屋王家木簡と二条大路木簡の発見

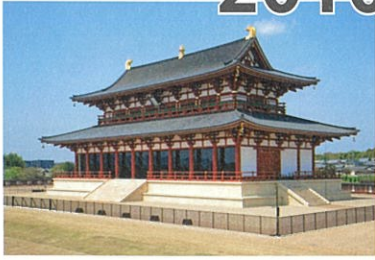


1982 山田寺で倒壊回廊発見

国際共同研究の高揚ー

1991 中国社会科学院考古研究所との共同研究開始

2010



第一次大極殿復原建物が完成



2008 西面回廊の連続的な調査

2001 第一次大極殿の復原工事開始
(文化庁)



2001 西楼の発掘調査



2009

47回に及ぶ第一次大極殿院地区の発掘調査に区切り

復原整備 に向けて—

大極殿復原にむけての補足的な発掘調査と復原研究の積み重ねの時期



2011 二冊目となる報告書刊行

2010 第一次大極殿院の復原研究始まる

2002 第一次大極殿復原に向けての細部に関する復原研究始まる(基壇・彩色・木部・瓦など)

1998 第一次大極殿復原建物の実施設計開始

2010

2008 平城宮跡の国営公園化閣議決定



2010 平城遷都 1300 年祭



2004 平城宮中央区朝堂院 朝庭で称徳天皇の大宮宮発見

2000



東院庭園復原整備完了

1998 朱雀門復原建物完成



1999 ~ 2002 興福寺中金堂院



2010

平城宮跡資料館リニューアルオープン



2006 ~ 07 高松塚古墳壁画の解体修理作業

2000 法華寺阿弥陀浄土院跡

2000 ~ 藤原宮朝堂院

2005 ~ 甘樫丘東麓遺跡

2001 国立文化財研究所から、独立行政法人文化財研究所となる

2007 独立行政法人文化財研究所から、独立行政法人国立文化財機構となる

新たな研究機関として—

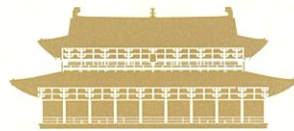
2004 ~ 07 キトラ古墳壁画の剥ぎ取り作業

2000 河南省文物考古研究所との共同研究開始

1999 韓国国立文化財研究所との共同研究開始



1997 吉備池廃寺金堂



THE AREA OF
THE FORMER IMPERIAL AUDIENCE HALL



2012年10月20日

編集・発行 独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町2-9-1

<http://www.nabunken.go.jp/>

表紙デザイン 野中優介

印刷 能登印刷株式会社